

SHANTI



2021.4.春
Vol. 309
シャンティ

巻末言 道



特集

ミャンマー(ビルマ) 難民キャンプでの20年

東日本大震災から10年 — 伝える心意気 —

宮城県徳本寺住職 常務理事 早坂文明

わが山元町は東日本大震災で甚大な被害に遭った。拙寺の沿岸部の中浜墓地は、壊滅状態で遺骨まで流出。その集落は小学校を除き1軒残らず流された。町内の600人を超す犠牲者のうちの2割強を占める。町内の沿岸部は災害危険区域となった。中浜墓地も移転を余儀なくされた。

2年後の3月、墓地跡に「鎮魂・東日本大震災石塔展」の縁で、古代五輪塔が建てられた。高さ3.8mという大きさを前に、私は「千年塔」と名付けた。大震災は千年に一度と呼ばれたが、千年先にも忘れず災禍を伝え、鎮魂と世の安寧を願ってのことだ。

千年塔は、奈良県西大寺の日本最大級の五輪塔と言われる叡尊塔を等身大のモデルとして造られた。叡尊といえばシャンティの創始者有馬実成師が、日本のボランティアの先達として、尊んでいた鎌倉時代の僧侶。ハンセン病者の救済や、橋や港湾の整備、寺社の復興など社会救済事業に尽力した。90歳で亡くなった1290年に、その足跡を慕って建てられたのが叡尊塔だ。



千年塔と中浜小学校 (2021年撮影)

奇しくもシャンティは震災翌年9月に拙寺の一隅に事務所を設け、山元町での移動図書館車の運行を始めていた。町内の9カ所の仮設住宅を巡回して、図書の貸し出しやお茶などを振る舞い、被災者の心に潤いをもたらした。その活動が呼び寄せたかのような千年塔である。

有馬師は自分の活動に行き詰まったときには、必ず奈良の叡尊ゆかりの地を訪れたという。そして再び勇気を取り戻すことができたと述べている。大震災の光景は、地獄そのものだった。千年塔の雄姿は地獄で仏に出会ったかのように、復興への先達となった。

この10年間で町は一応の復興を果たした。中浜墓地に隣接して、流出を逃れた中浜小学校には、震災時90人の児童や先生等が避難して全員無事救出された。昨年9月、校舎は震災遺構として公開された。グッドデザイン賞にも輝き、復興のランドマークとなっている。叡尊入滅後731年、有馬師没して21年、大震災より10年、ボランティアとは伝えるという心意気でもあろう。



登校する子どもたち (2018年撮影)
©Yoshifumi Kawabata

SHANTI vol.309 CONTENTS

- 4 公益社団法人シャンティ国際ボランティア会40年記念対談②
ミャンマー事務所 所長、かものはしプロジェクト理事長、
地球市民事業課課長 JANIC理事長

市川 齊 × 本木 恵介

- 6 特集
ミャンマー(ビルマ)難民キャンプでの20年

- 16 世界の絵本を読んでみよう
「小さな村は町になる」
ミャンマー(ビルマ)難民キャンプ 2014年

- 18 世界のおやつ旅
ネパールのおやつ/モモ

- 19 世界の現場からAIRMAIL
From 活動の現場 & 現地のスタッフレポート
▶ネパール事務所

- 26 Shanti@Tokyo

- 28 シャンティな人たち
下秋 泰子

- 株式会社 俄 広報課
30 ファインダーをのぞいて
「そして祖国へ」

- 31 お知らせ

- 32 道
東日本大震災から10年 一伝える心意気—
宮城県徳本寺住職 常務理事 早坂文明

1984年にタイ・ミャンマー国境に9カ所の難民キャンプが設置され、今も約9万人が暮らしています。シャンティは2000年から、7カ所の難民キャンプでコミュニティ図書館活動を開始しました。電気がなく、難民キャンプの外へ出ることもできない子どもたちにとって、絵本を読むことができる図書館は外の世界に触れる数少ない場所です。現在、ミャンマー側への帰還の動きが始まっていますが、帰還先での生計手段がないことなどから、難民キャンプで暮らす人の8割は帰還を望んでいません。先行きが見えないなか、不安を抱える人々の思いや図書館の役割を紹介します。



今号の表紙
図書館員と常連の子どもたち (2015年撮影)
©Yoshifumi Kawabata

NGOの組織作り

学生時代から児童買春問題に取り組み、自ら団体を立ち上げ活動を続ける本木氏と、海外の現場と日本で組織を作る経歴を積んだ市川所長。理想と現実と葛藤しつつ、持続的な活動のために組織基盤を固め、働きやすい環境を整えることに注力しながら組織を牽引してきた二人が、「社会をよくするプロフェッショナル」として、NGOの組織作りについて語ります。

NGOの在り方を考える

市川：シャンティに入職してから30年がたとうとしています。この間、NGOの組織経営やキャリアの考え方が大きく変わってきたと感じています。私は、アフガニスタン事務所での事業運営を経て、日本で組織経営やマネジメントを担う立場でしたが、その都度難しさに直面してきました。ある時、職員から私のやり方に疑問を投げかけられたことがあり、そこからリーダーシップやマネジメントを真剣に考えるようになりました。

本木：わかります。僕もカンボジアで仕事への仕事を同時に持つことへの抵抗感もだいぶ減ったと感じています。これからは、個人がより力を持ち、必要な時に、必要なネットワークを作ってプロジェクトを展開することが増えると思います。その一方で、大規模災害のような緊急事態に備えて、スピーディーかつダイナミックに活動を展開できる、専門性が高く堅牢なNGOも必要だという気がします。

市川：どちらの動きも必要ですね。私はNGOの職員がプロとして持続的に活動を行うには、給与も重要だと思います。2008年から10年ほど執行部に在籍していたのですが、職員の給与体系を作る時に、何を基準にしたらよいかすごく悩みました。職員が安心して勤務できるように給与体系が整備できている時代でした。

本木：2000年代に入り、NGOは給与体系や福利厚生、規程類を整備するなど組織運営を見直す流れが強かったと思います。そのおかげで、NGOの待遇もだいぶ改善されたと思います。一方で、報酬とは何かを考えると賃金だけでなく人間関係も大事だと思っています。さまざまな人と会って一緒に仕事をする中で、自分の人生の豊かさにつながると感じています。

特別連載

公益社団法人シャンティ国際 ボランティア会40年記念対談②

ミャンマー事務所 所長、
地球市民事業課 課長

市川 齊

PROFILE

1990年シャンティ入職。阪神淡路大震災で神戸事務所長後、緊急救援活動に関わる。アフガニスタン事務所長、海外事業課長、事務局長次長（経理総務課長兼務）、常務理事に就任。2019年7月よりミャンマー事務所長を経て現職。ジャパンプラットフォーム副代表、国際協力NGOセンター副理事長など歴任。



ミャンマー事務所赴任時（2019年7月）

かものはしプロジェクト 理事長、
JANIC 理事長

本木 恵介 さん

PROFILE

認定NPO法人かものはしプロジェクト共同創業者・理事長。インドで「子どもが売られる問題」をなくすための活動を、日本で子どもの不条理をなくすための活動を行っている。2019年、認定NPO法人国際協力NGOセンター（JANIC）の理事長に就任。NPO法人SALASUSU理事長。NPO法人新公益連盟幹事。



カンボジアのコミュニティファクトリー
©Natsuki Yasuda_Dialogue for People

していた頃、スタッフとなかなかうまくいかず、ミーティング中に呼吸ができなくなってしまう。追いつけず、人を傷つけたり、自分が傷ついていました。そういう経験を通して、自分のコミュニケーションがいかに相手にインパクトを与えるのかがわかりました。

ところで、新型コロナウイルスの感染拡大によって、NGOでも在宅勤務が増えています。働き方も含め、日本のNGOはどうあるべきなのだろうと考えることが多くなってきました。どう思われますか。

市川：そうですね。NGOの働き方は大きく変わりましたね。新型コロナウィルス感染拡大の影響で、昨年日本に戻ってきてからはミャンマー事務所の職員とオンラインで仕事をしています。オンラインを活用するようになったことで、現地職員を中心とした事業運営が加速したように感じています。これからのNGOは働く場所や組織を越えてミッションごとにチームを作り、やり遂げたら解散するというような柔軟なやり方もあるでしょうね。

本木：私もそう考えています。企業だけではなくNGOも在宅勤務が増え、オフィスに長く滞在する必要性がなくなりました。複数

NGOにしか果たせない役割とは

市川：阪神淡路大震災発生後、災害支援をしている先輩から言われた言葉があるんです。「どんなに民主主義が発展しても最大多数の幸福しか機能として果たさない。NGOというのは残りの1人、仕組みから外れている人に寄り添い耳を傾けることだ」と。この言葉が目が覚めました。セーフティネットから漏れ、声を出すことができない人にどう寄り添うのか。それを考えるのがNGOの仕事であり、強みなのだと感じた時でした。

本木：まさに僕もそう思っています。インドのシエルトーにいた女性のようにかき消されてしまうような声に耳を傾けて、共に活動するのがNGOなのだろうと。今グローバル化に歯止めがかかっていて、国同士の衝突や対立が高まる可能性もあります。ですが、国や民族、思想といった違いを豊かさに変える力が、NGOにはある気がするんです。

市川：「経済のグローバル化はできたけれど、市民社会のグローバル化はまだされていない」と言われますよね。そこに先手を打つのがNGOだと僕は信じています。活動を通して、国境を超えた市民社会を実現させたいです。

ミャンマー(ビルマ) 難民キャンプでの 20年

難民キャンプの今

タイ・ミャンマー国境にある難民キャンプは1984年に設立されて36年が経過しました。タイ側国境にある9カ所の難民キャンプには、2020年12月時点で約9万1千人の難民が暮らしています。第三世代、第四世代の子ども

のままでタイ側へ逃れ、難民として人生を強いられることになりました。

ミャンマーでは2011年の民政移管以降、政府と少数民族武装勢力との間で和平に向けた協議が行われ、2015年10月、カレン民族同盟(KNU)をはじめとする8つの勢力が停戦合意に署名をしました。ミャンマー国内で和平に向けた大きな動きが見えた時でした。2016年にはタイ・ミャンマー両政府合意の下、帰還支援プログラムが開始し、現在までに



難民キャンプの風景

や孫を含む数であり、生まれ育ったキャンプから一度も外に出られません。ミャンマーには政府と少数民族武装勢力との紛争が60年以上続いてきた歴史があります。特にタイと国境を接するカレン州で国軍による村の焼き討ちや強制労働などが行われ、人々は着の身着

1039人の難民がミャンマーに戻ってきました。国民民主連盟(NLD)による新政権発足後も協議は継続し、2017年には新たに2つの勢力が署名するなど、表向きには和平プロセスが順調に進んでいるかのように見えています。しかし、今なお9万人以上の難民は帰還できておらず、長期化するキャンプでの生活で将来や日常生活に不安を感じ、暴力事件、自殺、アルコールや薬物などの社会問題が増加しています。



難民キャンプの人口

91,803人

出典：UNHCR Thailand 2020年12月

配給



家の資材や食料はNGOによって配給されています。家の補修材料は、厳しい審査を通過しないと受け取れません。また、以前は米、大豆、塩、油などの食材は現物が配給されていました。現在は食費が住民のカードに支給され、住民自身がNGOの運営する食品店で購入するシステムに変化しました。



医療

必要なサービスを提供するため、NGOが難民キャンプ内で診療所を運営しています。診療所には、医師免許を持った外部の医師から指導を受けた難民キャンプの住民が医療従事者として常駐しています。加えて、難民キャンプ外の医師が監督責任を負い、診療所職員を常に支えています。

学校生活

子どもたちは保育園から高校までの教育を、ほぼ無料で受けることができます。多くの学校でカレン語が使われていますが、ビルマ語を話す学生が多い場合は、ビルマ語を使う学校もあります。授業には、数学、科学、地理、歴史、カレン語、ビルマ語、英語の7つの科目があります。また、いくつかの難民キャンプでは高校以上の授業も行われており、学生は高校卒業後も勉強を続けることができます。



伝統文化の継承

メラ難民キャンプには、10以上の民族が暮らしており、各民族の文化的アイデンティティを維持するため、難民キャンプ委員会内に民族を管轄する部署があります。伝統的なお祭りなどがある場合は、式典といった形で、委員会内で企画し、開催されます。また、少数民族の言語が忘れ去られないように、モン族やカチン族などは語学教室を開いています。さらに、学校では週に1日、伝統衣装(主に上着)を着用することを義務付けています。



難民キャンプ内のルール

正式な許可を得ない限り、難民キャンプの外に出ることはできません。最近では新型コロナウイルス感染対策として、午後7時から午前6時まで、難民キャンプ内での外出も許されず、外出時のマスク着用は必須です。乾季前は、午前8時から午後4時まで火の使用は禁止されます。また、火災が起こった際に鎮火活動に使用するための砂と水を、各20袋用意し、家の外につるすことが義務付けられています。



上下水道環境

NGOが給水、衛生サービスを提供し、表層水や地下水源から公共蛇口に飲料水が供給されています。また、非飲料水として地下水をくみ上げるポンプなどの施設が、難民キャンプ全体に設置されています。廃棄物や廃水処理は難民キャンプ委員会とNGOが管理し、病気のまん延防止と環境保全に取り組んでいます。

難民キャンプでの生活

タイ・ミャンマー国境の難民キャンプは立入禁止区域となっており、鉄線で囲われているため、許可なく出入りすることはできません。また、働いて収入を得ることが原則認められていないため、難民キャンプに暮らす人々の、衣食住、医療、教育など、日常生活で基本的に必要とされるものすべてが国際支援によって提供されています。しかし、食材の配給だけでは家族が食べていくには十分ではなく、中には、野菜を育てたり、動物を育てたりするための小さな場所を持つ人もいます。大半の人は生活のすべてを国際支援に頼らなければなりません。



ファッション

特に若者はTシャツにジーンズやスカートといった服装をしていますが、新年、結婚式、感謝祭、宗教的な式典などが開催される特別な日には、自分の民族の伝統衣装を着ます。女性も男性も、タナカと呼ばれる樹木から作られる天然化粧品を美容、スキンケア、日焼け防止のために使っています。

知っておきたい

難民キャンプの暮らし

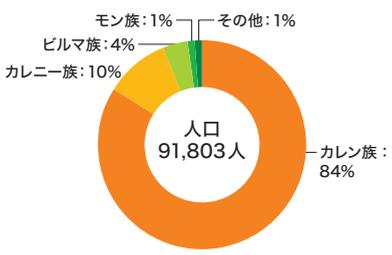
食事

米、野菜、時には肉、発酵させた魚のすり身をよく食べ、食事の多くが唐辛子、ターメリック、生姜、カルダモン、ニンニク、タマリンド、ライムの果汁などで味付けされます。魚のすり身は、発酵させた魚を練り物にして叩いた、味の濃い料理です。



民族

代表的な民族はカレン、カレニー、ビルマ、モンです。少数ですが、カチン、チン、ナガ、バオ、アラカン、シャン、ラフ、リスといった民族も暮らしています。



※出典：UNHCR Thailand 2020年12月

住まい

恒久的な資材で家を作ることには難民キャンプでは許されておらず、葉っぱで作られた屋根、ユーカリで作られた柱、竹で作られた壁が基本です。中は家族数によって異なりますが、広い共用の部屋に、個室が1~2部屋といった構成になります。高床式の家なので、中に入るには竹などの木材から作られた階段を上がります。家の下のスペースは仕事場や家畜を飼育する場として使われることが多いです。



言語

難民キャンプ内での公用語はビルマ語です。しかし8割以上の人はカレン語が母語のため、場面によって使い分けています。カレン語はビルマ語に似ていますが、発音や文法が異なります。

カレン語
ဟိလာအူ
ハラゲー (こんには)

ビルマ語
မင်္ဂလာပါ
ミンガーラーパー (こんには)

時間のある時は図書館に行ったり、近くの友達の家遊びに行っておしゃべりしたりするのが好きです。
将来学校を卒業した後は、医療の勉強をして、3年間は医療の現場で働きたいと思っています。家族だけでなく、患者さんを助けられる人になりたいです。その後、子どもたちに英語を教える先生になりたいと思っています。

時々、難民キャンプの外で家族全員一緒に暮らすことを考え、外の世界で新しいものを見てみたいと思っています。ミャンマーには戻りたくないのですが、可能であれば難民キャンプの外で過ごしたいです。外に出る機会があ

難民キャンプの中で育った人



ノー・タ・プエ・ポーさん(18歳)
居住地: 難民キャンプ
職業: 学生(高校生)
家族構成: 6人(両親、2人の姉、弟1人と自分)
民族: カレン族

るのであれば、勉強のためにオーストラリアに行きたいです。



私たちが今思うこと

2016年からミャンマーへの帰還が始まった一方で、ミャンマーには戻らず難民キャンプでの生活を続けることを選んだ人もいます。ミャンマーに帰還した人、難民キャンプにとどまる人など、世代や生活環境の異なる4人に、現在の暮らしや将来の生活について伺いました。

難民キャンプを出て暮らす人 (ミャンマーに帰還した人)



ノー・デー・デーさん(27歳)
居住地: レイケイコー村
職業: レイケイコー村CRC(コミュニティリソースセンター)の職員
家族構成: 6人(両親、夫、娘と自分)
民族: カレン族
※レイケイコー村とは、ミャンマー側の難民の帰還先の村のひとつです。



私は2015年12月頃に難民キャンプを離れ、両親と一緒にレイケイコー村で暮らし始めました。難民キャンプでは、将来自分が何をすべきか明確な方向性が見えてきませんでした。そこで、難民キャンプを出て、ミャンマーで暮らすことを決めました。ここでは自分の家を持つことができ、身分証明書があり、自由に動くことができます。行きたいところはどこにでも行けて、やりたいことは何でもできて、難民キャンプで暮らしていた時のように許可を取る必要はありません。

難民キャンプでは、収入を得られる仕事に就く機会是非常に限られています。NGOの支援により支えられているという良い点もあります。例えば身分証明書を自分で政府に申請したり、病院へ行くために費用を払ったり、食料品を自分のお金で買うといったことは現在の生活ならではありません。

難民キャンプの中で働く人



ノー・ブレ・ポーさん(42歳)
居住地: 難民キャンプ
仕事: 小学校の教員(兼校長)
家族構成: 4人(夫、2人の息子と自分)。長男は難民キャンプ内の医療従事者になるための勉強をしていて、次男は小学校に通っています。
民族: カレン族
好きな言葉: 見返りを期待せずに何かをすることで、祝福を得ることができると、苦しいことはあるもの、この仕事に本当にやりがいを感じます。



私は11年以上生徒を指導してきました。生徒たちには無事に教育課程を修了して卒業し、就職し、自分の人生を充実させてほしいと願っています。生徒がよい意味で変化していたり、クラスの半数以上が試験に合格するのを見ると、嬉しいと感じます。

私は難民キャンプがある限り、ここにどまりたいと思っています。他の場所に住むことは考えていません。もしこの難民キャンプが閉鎖され、他の場所に移動しなければならぬ時が将来あれば、住人全員と一緒に移動する覚悟はできています。

学校の校長の給料は月に1100バツで、家族や子どもを養うには十分ではありません。私は豚などの家畜を育てて販売したいと思っています。そして、教員として働けなくなった時は、地域に貢献したいと思っています。

難民キャンプで長く暮らす人



ノー・ダ・ポーさん(61歳)
居住地: 難民キャンプ
職業: 農業
家族構成: 10人(夫、息子、2人の娘とその孫2人、1人の姪、1人の甥とその子ども1人、自分)
民族: カレン族

1998年から私の家族、子どもたちと一緒に難民キャンプで暮らしています。難民キャンプで暮らし始めた当初と比べると、難民キャンプの中が狭くなったというか、人が多くなったように思います。

ミャンマーの状況がまだ安定していないので戻りたくはありません。また、ミャンマーにはもう親戚もいないので、会う人もいません。難民キャンプにもう20年以上住んでいるので、ここが自分の居場所だと思っています。第三国に行くことができたとしても、そこで新しい生活を始めるのは嫌で、このように自分の農地もあります。難民



キャンプがある限り、ここに滞在するつもりですが、もし閉鎖する場合は、何とかしてタイで暮らしたいです。



⑥各図書館に情報掲示板を設置

ミャンマーの民主化により、ミャンマー本国への帰還の可能性が出たことを受け、住民が将来について検討する上での情報提供を強化するため、掲示板を各図書館に設置しました。読書推進として、新刊本の情報や利用者の読書感想文も掲示されています。



④難民子ども文化祭
(2009年から計10回開催)

さまざまな民族が暮らす難民キャンプで、それぞれの伝統文化の保護と互いの文化理解を養うため、年に1回難民子ども文化祭を開催しました。全ての少数民族グループが参加、子どもたちがゲーム等を通して交流し、伝統的な踊りを披露しました。



②メーソット*事務所開設、
新たに3カ所の難民キャンプで活動開始

対象キャンプの拡大に伴い、メーソットに事務所を開設。新たな職員も増えました。建設を終え、迎えたヌボ難民キャンプでの開館当日、セレモニーに図書館委員会の姿がありませんでした。活動の難しさを痛感した日でした。

*メーソット…ミャンマーとの国境に接するタイ側の町

20年のあゆみ



シャンティが難民キャンプで活動を開始してから20年が経過しました。2000年の活動開始から現在に至るまで、難民キャンプでの教育の質を高めるための読書と文化活動の促進を目的とした図書館プロジェクトを実施しています。2019年には、難民の帰還に向けた復興、再定住支援を行うため、ミャンマー側に新たな事務所を立ち上げました。難民キャンプに暮らす人々と共に歩んだ20年間で、当時の写真とあわせて振り返ります。

2013

心のより所としての図書館

図書館ができた当初は、子どもの声がうるさい、子どもは学校が終わったら家の手伝いをすべきといった意見がありました。しかし、図書館から帰ってくる子どもたちが思いやりを持つようになり、勉強に積極的に取り組むなどの行動変容が見られると、次第に図書館は受け入れられるようになりました。今では図書館は、学習の機会を提供するとともに、将来が見えない難民キャンプの環境の中で、住民が抱える不安を忘れることのできる大切な居場所となっています。帰還の動きを受け、近年はミャンマー本国に関する情報提供に力を入れ、ミャンマーから購入した本も配架するようにしています。また、2019年は新型コロナウイルスの世界的な感染拡大を受け、図書館を一時的に閉館し、感染対策の準備をしました。現在は入館前の検温、手洗いを徹底し、入館人数の制限などを行っています。その時々住民の抱える課題に対応し、寄り添いながら、図書館は20年、開館を続けています。

2012



⑤サッカーフェスティバル開始
(2012年から計7回開催)

難民キャンプの外に出ることができない子どもたちのなかで人気の遊びがサッカーです。毎年6月20日の世界難民の日に合わせて、元Jリーガーの方に難民キャンプへ足を運んでいただき、子どもたちにサッカー教室を開催しました。

2006



③図書館青年ボランティア活動開始

閉鎖的な難民キャンプの環境で将来に希望を見いだせず、自殺などに走る青年たちへの対応が必要になっています。青年たちが図書館運営に携わることで居場所を見つけ、中心となって積極的な読書推進活動が行われています。

2002

2001



①メコンカ難民キャンプに
1館目の図書館が開館

2000年9月の事務所開設から準備を進め、第1館目の図書館がメコンカ難民キャンプに開館しました。セレモニーでは開いたくす玉から「図書館へようこそ!」の文字が現われ、歓声とともに大きな拍手が沸き起こりました。

ミャンマー国内では2011年の民政移管以降、和平に向けた対話が続いていますが、現在も9万人以上がタイ側の難民キャンプでの生活を余儀なくされています。タイ政府は本国への強制的帰還や早期のキャンプ閉鎖は示していないことから、帰還プロセスが進まない現状では、さまざまな制約の中にあっても、生きていく拠点があることは、難民の人たちにとっては救いになるのではと思います。

「難民キャンプで暮らしていた時、図書館によく通って本を借りたりイベントに参加したりして、シヤンティイのことはその頃から知っていました」こう話すのは、2019年から開始したコミュニティリソースセンター（以下CRC）で勤務しているノー・デー・デー（10ページ参照）さんです。彼女は2008年から約6年間難民キャンプで過ごし、2015年にシヤンティイの活動対象村の一つであるミャンマー側のレイケイコー村に移って来ました。現在はこちら



CRCで絵本を読む中原所長
「せかいでいちばんつよい国」
作・絵:デビッド・マッキー 訳:なかがわちひろ
光村教育図書

親、ご主人、娘さんの家族5人で暮らしています。レイケイコー村は帰還民を受け入れる村の一つで、人口が最も多いところですが、以前から住んでいる地元住民、元移民労働者や国内避難民が混合しており、同村での帰還民の割合は約25%にしか過ぎません。このようなさまざまな背景や歴史を持つ人々が一つの村に共存し、地域を作り上げていくことは容易ではなく、一緒になって地域開発や課題解決のために取り組める環境が大事になってきます。そこで帰還民と地域住民が集う場所として、CRCを建設し、活動を始めることになりました。そ

の中で、難民キャンプでの図書館活動をよく知るノー・デー・デーさんに出会いました。彼女は言いました。「私は全ての人にCRCに来てもらい、情報を得て生活レベルを向上させてほしい。CRCは村のシンボルであり、平和で豊かな村にしてくれる存在で、私たちに力を与えてくれます」。とても前向きで行動力がある彼女に心打たれましたが、一方で帰還への決心ができない人たちがいます。今はまだ帰還する時期ではない、支援がない中でどう生きていけるのか、平和と安全が確保されるまでは戻りたくないと考えているからです。政治的なプロセスが進んでも、現実とは乖離があるように強く感じます。こうした中で何ができるのか、難民キャンプ、帰還村に住む人たちの声にしっかりと耳を傾け、彼らが必要とする支援活動に取り組むことではないかと思っています。難民キャンプ図書館とCRCがその受け皿となれるように関係者と力を合わせていきたいと思っています。

タイ・ミャンマー国境に難民キャンプが作られたのが、今から約35年前、シヤンティイが図書館活動を開始してから20年が過ぎようとしています。人間で言うくと、成人を迎えました。現在は7つの難民キャンプで15のコミュニティ図書館を運営しており、本の貸し出しや読み聞かせ、ゲーム、歌などの活動を続けています。モニタリングや図書館利用者へのインタビューから、20年の間に図書館は多くの人々に、特に子どもたちに大きな影響を与えてきたと確信しています。図書館に毎日やってくる子どもたち、学校の昼休みに図書館に来て読み聞かせを聞くのが大好きな子どもたち。彼らが青年となり、積極的に図書館活動を支えるボランティアになってくれています。子どもの頃、図書館に通って読み聞かせを聞いていた若いお母さんたちは、自分の子どもにも通わせたいと応接してくれています。多くの親、教員、図書館員は、読み聞かせや読書を通じて子どもたちの行動や性格が良い方向



難民キャンプの図書館で読み聞かせをする
セイラー 副所長

に変化しているのを目の当たりにし、図書館活動の意義を理解するようになってきました。子どもたちが本を手にして楽しんでいる姿を見て、難民キャンプでの苦しい生活の中で、本は癒やしになっていると思うようになりました。文化活動の一つとして、キャンプ内に住む異なる民族の子どもたちの平和と交流を願い、難民子ども文化祭を開催しました。昼間は各民族の子どもたちが一緒にゲームや読み聞かせなどを楽しみ、夜は、民族衣装に身を包んだ子どもたちが、それぞれの民族の踊りや歌を誇らし

げに披露しました。彼らの自信に満ちた姿を見て、私たち大人はどれほどの感動をもらったかわかりません。20年間の活動で多くの課題にも直面しましたが、良い影響を知りながら継続することが大事だと強く思うようになりました。難民キャンプという困難な環境にあっても、図書館活動は子どもたちの未来につながっている、そう夢を持ち続けて活動にまい進することができました。長期化する難民キャンプでは、国際社会からの支援の減少に加え、難民キャンプで活動する多くのNGOが資金面での課題等から撤退または事業縮小を検討しています。このような状況下で、難民キャンプ内の人々を私が持っている全ての能力とスキルで支援し続けることを目指しています。今後も図書館活動を継続していきけるように、子どもたちの未来を支えられるように、お力添えいただけます。よろしくお願いたします。

「困難な環境の中でも、図書館活動は子どもたちの未来につながっている」

ミャンマー国境支援事業事務所 (MBP) 副所長
ジラポーン・ラウィルン (セイラー)



「人々の声に耳を傾け続ける」

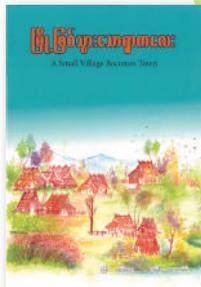
ミャンマー国境支援事業事務所 (MBP) 所長
中原 亜紀



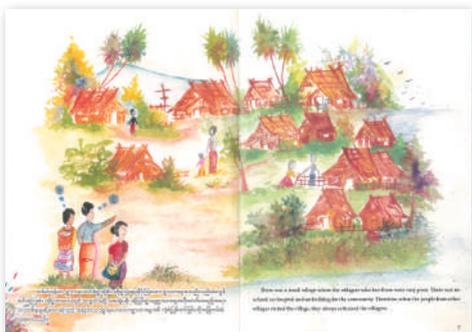
世界の絵本を
読んでみよう

34

ミャンマー(ビルマ)
難民キャンプ 2014年
シャントイ出版絵本



小さな村は 町になる

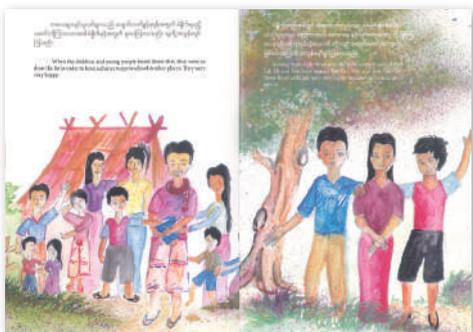


1

あるところに、とても貧しい村がありました。村には学校や病院といった、人々にとって大切な建物が何一つとしてありませんでした。

2

村をよくするために、くじで「当たり」を引いた人を学校に通わせることにしました。貧しいために村のみんなが学校に行くことは難しかったのです。



3

選ばれた三人の若者は、村人たちが集めたお金で学校に通い始めました。他の生徒にひどいことを言われても、三人は一生懸命勉強しました。

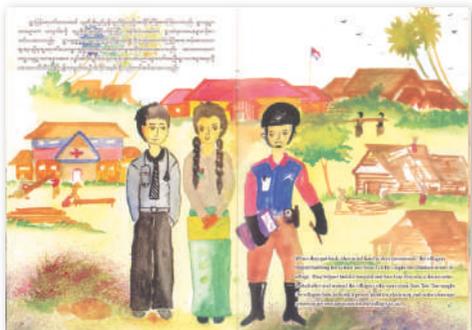
4

女の子は先生に、男の子は医者とエンジニアになって、村のためになりたいと思っていました。夢に向かって三人はたくさん勉強しました。



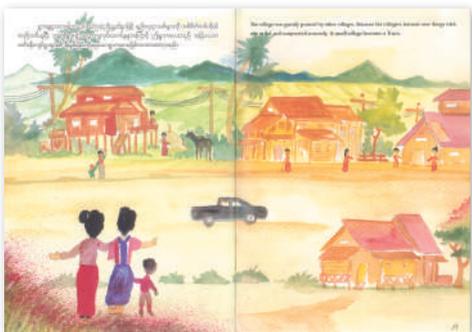
5

学校を卒業すると三人は村に戻り、村をよりよくしたいと考えている仲間と出会いました。三人と仲間の村人たちは協力して働きました。



6

三人は学んできたことを村に持ち帰ってきたのです。貧しい村はどんどんよくなり、みちがえるほどになりました。こうして小さな村は町となりました。



世界の現場から

AIRMAIL

To 日本の皆さん From 活動の現場

このページでは、
アジアの各国で活動する
シャンティの様子や
スタッフを紹介します。

From Nepal

ネパール事務所

2015年に発生したネパール地震をきっかけに復興支援事業を開始。その後2016年に事務所を開設。学校建設と防災教育事業に取り組んできました。ハード面での復興が進む中、次のフェーズとして教育の質を改善する事業に取り組むネパールの活動を紹介します。



◀ ネパールの食をレポート!

ネパールでは近年、子どもの栄養不足と肥満が問題になっています。ネパールの伝統料理をシャンティスタッフがレシピと共に紹介します。



ものづくりの舞台裏をレポート! ▶

地震の発生メカニズムや防災知識を、紙芝居を通じて楽しくわかりやすく子どもたちに伝える防災紙芝居。その制作の舞台裏をのぞいてみました。



ネパール事務所
ブラジュさんの
おすすめおやつ



餃子や小籠包のような ネパールの国民食!

ナマステ。ネパールで広く愛される国民食「モモ」は、一口サイズの餃子のような見た目をしており、スプーン一杯ほどの野菜・肉のあんを生地で包み、「アチャール」と呼ばれるディップソースをつけて食べます。熱々の状態で食べるのが格別です。最も一般的な具材は、水牛の肉、鶏肉、野菜です。調理法もさまざま、基本は蒸したのですが、揚げたり蒸したモモをフライパンで焼いて皮をカリカリにしたものもあります。昼ご飯、軽食、夕食と全ての食事で食べられており、ネパールで広く愛される国民食となっています。皆さんもオリジナルのあんを試しながら、モモを作ってみませんか?

ネパールのおやつ

モモ

㊄:㊄:

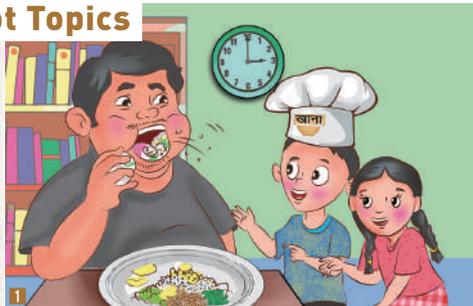


ネパール事務所の総務・会計アシスタントを担当しています。



モモは様々なレストランで食べることができます。写真はシャンティのネパール事務所近くのレストランで店主がモモを作っている様子です。

Hot Topics



1 先住民族地域における地域学習のカリキュラムの開発・普及事業

事業対象地のラクシラン自治体で2021年1月から教員向けの研修を開始しました。1年生から8年生を対象としたカリキュラムが完成し、現在は教員向けの指導方法の手引書と、1年生から5年生の教科書も作成しています。加えて、地域についての歌“ラクシランの歌”も作られました。

1 栄養教育改善事業 (国連世界食糧計画(WFP)連携)

紙芝居やポスター、ラジオ番組を通じて、栄養や正しい食生活について、子どもや母親の理解を促進します。



3 コミュニティ図書館の建設

現在、1館のコミュニティ図書館を建設中で、開館に向け、図書館運営委員会への研修も実施しています。今後さらに、3館の建設を開始する予定です。



ネパール事務所
プログラム・マネジャー
ビノッド・グルンさん

PROFILE

ネパールの大学で教育学、大学院で人類学、ドイツの大学院で持続的な環境管理について学ぶ。卒業後、さまざまな教育の現場で経験を積み、教育分野におけるキャリアに貢献することを決心し、2017年、シャンティに入職。

いており、多くの問題は教育の力で立ち向かうことができると思っています。事業を完了する時には、子どもたちがどんなに本を読むことが大好きなのか、直に感じることで、私たちの仕事の成功と価値を目の当たりにしています。

世界のあらゆる問題に教育の力で立ち向かう

今、この世界で起きているあらゆる事象や問題は、教育に深く結びつ

いており、多くの問題は教育の力で立ち向かうことができると思っています。事業を完了する時には、子どもたちがどんなに本を読むことが大好きなのか、直に感じることで、私たちの仕事の成功と価値を目の当たりにしています。

自身の一生を教育支援に懸けることを心に決めて

ネパール事務所では、2020年から栄養教育改善事業、先住民族地域における地域学習カリキュラムの開発・普及事業、コミュニティ図書館の建設などを行っています。建設事業は、人材や資金などのリソースが効率よく投入され、また、建設業者に任せきりではなく、きめ細かいモニタリングやフォローアップを行い、効果的に実施されています。

新型コロナウイルス感染拡大による間接的影響は悲惨で、感染を恐れた人々が病気やケガで治療が必要でも病院に行きたがらず、死亡率が高くなっています。教育やジェンダー、経済などあらゆる分野に影響を与えています。



From Nepal ネパール事務所

震災復興支援の次の課題としてスタートした、先住民族地域における教育の質を改善する事業に取り組む様子を紹介します。



急速な近代化とともに、ジャンクフードなどの不健康な食事による子どもの栄養不足と肥満が問題となっているネパール。国連世界食糧計画（WFP）はヌワコット郡の全440の公立校を対象に、給食の調理場の整備や自治体の能力強化などを行う栄養教育改善事業を実施しています。シャンティはこれまで同地域で防災教育を行ってきた知見と教育分野での専門性を生かして、本事業の栄養教育に関する活動を担

うことになりました。栄養教育に関する紙芝居を制作し、教員や保護者への栄養教育研修を実施します。WFP事業全体で、学校や行政が地域の食材や物資、人材を活用し、栄養バランスの整った地産地消の給食を提供することで、子どもたちが心身共に健やかに成長することを目指しています。

From Nepal / ネパール事務所

ネパールの民族家庭料理

ネパールで活動する栄養教育改善事業
国連世界食糧計画（WFP）連携



バラ/チャタマリ

おすすめ
スタッフ



エキナさん
（総務・経理コーディネーター）



ブラジュさん
（総務・会計アシスタント）

バラとチャタマリはどちらもネパール族（カトマンズ地域）の料理です。写真は、チャタマリの上にバラを乗せ、さらに卵、ひき肉、トマト、玉ねぎ、パクチーを乗せて焼いています。高たんぱく・低脂肪、マグネシウムや食物繊維などのミネラル成分を含む栄養価の高い料理です。



マタールパニール

（クリーミーなインドチーズ入りカレー）

カウリアール/キール

（じゃがいもとカリフラワーのカレー）



おすすめ
スタッフ
ビンドラさん
（警備）

キールはヒンドゥー教バフンの人々の間でお祝いの際に食べられる料理です。キールの作り方は、温めた牛乳に米、ギー（インドでもよく食べられる、バターをさらに精製したもの）、カシューナッツ、ココナッツ、砂糖を加え、30～40分ほど煮込んだら完成です。マタールパニール、カウリアールと一緒に食べます。



ブテコ マカイ/ウシネコ ピダル/ グンドゥルック アチャール/ ナレパ、コドコラクシ

おすすめ
スタッフ



ビンドラさん
（プログラマー・マネジャー）

ブテコ マカイはポップコーンと似ている、子どもたちに人気のおやつです。ウシネコ ピダルはゆでた里芋のことです。グンドゥルック アチャールはマスタードと青菜を発酵・乾燥させて作ります。ナレパ/コドコラクシは穀物を原料とするウイスキーで、伝統的な蒸留法を用いて製造します。



シスヌ/ディンド

おすすめ
スタッフ



ガネッシュさん
（コーディネーター）

タマン族に伝わる料理で、鉄分やカリウムがたっぷり含まれています。シスヌは牛乳、ネトルリーフ（日本名イラクサ）、ニンニク、ドライターメリック、クミン、マスタードオイル、塩を加えてよく煮込んだら完成です。穀物の粉とお湯をよく練って作る、ディンドと一緒にいただきます。



マナ

おすすめ
スタッフ



ナワールさん
（アシスタント・コーディネーター）

マナは極西部の山岳地域に住む人々に愛される料理で、お祝い事など特別な時に振る舞われます。柔らかく甘いマナは、サブジ（野菜にスパイスをまぶして炒め、さらに蒸した料理）や牛乳、カード（牛乳などの乳に酢を加えてつくるもの）、はちみつと一緒にいただきます。



キネマ/チャムリ

おすすめ
スタッフ



プレムさん
（ドライバー）

リンブ族に伝わる料理で、お祝い事やお祭りの際に食べられることが多いです。キネマは、ゆでた大豆を食用の灰と混ぜて布に包んで4～5日寝かせ、さらに5日間乾燥させた後、洗って灰を落とし調理します。チャムリは生米を20分水につけた後、ギー、フェヌグreek、クミンといったスパイス、水、塩を加えて20～30分炊きます。

舞台の
ウラ側



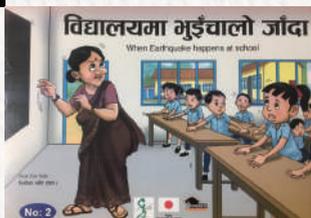
1

1. 物語の草案は職員のアイデアから

最初に、ネパール事務所の職員で物語を考えました。次に、イラストを草案します。そこからさらに議論を重ね、日本の紙芝居作家からアドバイスをいただきながら、推敲していきました。物語がまとまったら、英語で考えていた文章をネパール語に翻訳します。

2. 修正を重ねながらチームで
仕上げていく

外部の編集者と協力しながらストーリーを完成させます。ストーリーに合わせてイラストレーターが絵を描き、デザイナーがカバーやタイトルなど紙芝居全体の様式をデザインします。日本の専門家のアドバイスを受けたり、制作中の紙芝居を実際に子どもたちの前で演じてみて反応を見ながら修正を重ね、仕上げていきます。印刷し、完成したら、実際に紙芝居を使う教員への研修も行います。



2



3. 学校などへ配布後、モニタリングを行う

各学校に紙芝居を配布します。配布後も、どのように紙芝居が使われているか、モニタリングを行います。シャンティの防災紙芝居は事業対象地の学校だけでなく、コミュニティ図書館や他のNGOの事業でも使用されています。



3

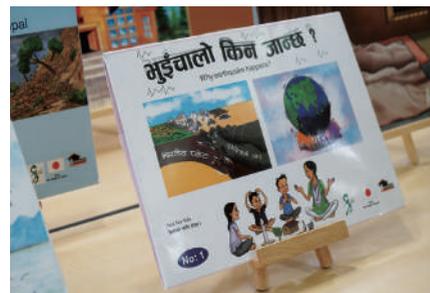


From Nepal / ネパール事務所
ものづくりの舞台ウラ
「防災紙芝居」づくり

2015年にネパールを襲った大地震後に注目された、ネパール国内における防災教育。シャンティがネパール事業の中で行う防災教育のウラ側を紹介します。



オモテ
舞台



制作秘話

理解し合うための調整を丁寧に

これまでネパールには紙芝居がなく、シャンティの紙芝居はネパールで最初の紙芝居となりました。今回のプロジェクトを進める中で、イラストレーターやデザイナーなど多くの人が紙芝居制作に関わっていますが、協力して働く必要があります。それぞれの意見の食い違いや誤解を乗り越えるため、私たちは頻繁に会議を開き、チームとして調整しました。

防災知識を養い、身を守る方法を学ぶ紙芝居

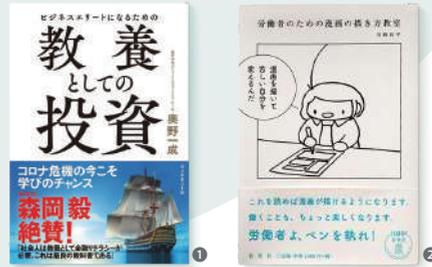
ネパールでは2015年に大地震が発生し、多くの人が亡くなり、家屋や学校が倒壊しました。そのことから、ネパール事業では、防災教育のひとつとして防災紙芝居の出版と普及を行っています。これまで作った紙芝居はヌワコット郡、ラスワ郡の被災小学校における防災能力強化事業で、子どもたちへの防災教育のために使用されています。子どもたちは物語を通して、防災知識を養い、身を守る方法を学んでいます。紙芝居は、子どもたちが楽しみながら学ぶことができる優れた教育ツールです。紙芝居を通して何を学んだか、男の子に尋ねると、地面のプレート同士がぶつかりあって地震が起きること、地震が起きたら頭を覆って避難することなど、身振り手振りを交え一生懸命教えてくれました。



経理課と総務人事課合同で
日帰り合宿をしました。

課員一人一人が、「シャンティの下支え業務」という以外は、異なった専門業務を行っているため、長い時間を使って会議をすることがなかったのですが、お互いの親睦と中期事業計画の共有、進捗確認を目的にソーシャルディスタンスを保った合宿を実施しました。

吉川さん
お気に入り
アイテム



2冊の本

①『ビジネスエリートになるための
教養としての投資』

奥野一成 (著)
ダイヤモンド社 2020年

企業とNGOの違いがあっても、長期に投資したくなる企業はどのような要素があるのかを知ることで、支援者や受益者から長く認められていく組織づくりを考えている私にとってはとても参考になる1冊です。

②『労働者のための漫画の描き方教室』

川崎昌平 (著)
春秋社 2018年

コロナ禍で思うようにいかないことが多くストレスがたまっている状況の中、自分の中のわだかまりを吐き出す方法を指南してくれます。



指定正味財産増減の	
2018年	
財産増減額	100,22
前期首残高	290,03
財産期末残高	390,26

社会に信頼される業界・組織と
なるため続く、経理のチャレンジ

私が担当する経理業務は、探りで始めた国際協力業界で、お金の出し入れの目的がわかるように取りまとめ、帳票を作り、誰が見てもわかるようにまとめていく仕事です。

長年、NPO法人で経理職を経験していたため、シャンティのことは以前より知っていました。当時から人件費を一般公開の会計報告にちゃんと表示する姿勢に共感を持っていたので、予算規模の大きいシャンティにおいても、自分の力が生かせるかどうか、チャレンジするつもりで入職しました。

私が最初に国際協力業界に関わったのが、1992年。この頃はNGO・NPOという言葉もなく、転職するときには「仙人になるのか」と言われたほどでした。情熱ある方々が手

探りで始めた国際協力業界ですが、欧米のように、社会に信頼される業界・組織にならないといけない、と感じていました。その信頼を維持していくために必要な「経理業務」の充実だと考えています。

シャンティが行う支援には、学校や図書館の建設や緊急復興支援など、目に見える支援の形があります。しかし重要なのは人材育成研修など目に見えづらい支援であり、これらは損益分岐点の基準がはっきりしません。つまり、財務諸表だけでは団体の健全性を証明することは難しいのです。そんな中で、健全な団体であること、財務諸表からどれだけ伝えることができるか、経理のチャレンジが続いています。



PROFILE
吉川 剛さん

生活関連企業で営業職、営業管理職で6年、NPO法人チャイルド・ファンド・ジャパンで経理職、経理管理職で21年勤務後、2013年入職。趣味は日本酒、洋酒(高くないのですが、日本酒ならアルコール度数15度以上、日本酒度+1以上の純米酒。洋酒なら香りがきつめのスコッチ)を飲むこと。



ミャンマー（ビルマ）難民キャンプ訪問時（2010年撮影）

下秋 泰子

株式会社 俄は、京都発祥のジュエリーブランド「NIWAKA」のデザイン・製造・販売を手掛けるジュエラーです。京都の歴史や文化によって育てられたことから、より豊かな教育や文化、芸術への発展に寄与したいと考え、社会貢献の一環としてシャンティの運動に参加したチャリティプロジェクト「PLEDGE（プレッジ）」を行っています。

チャリティプロジェクト 「PLEDGE」

誰でも「誓い」を投稿し、気軽にチャリティに参加できるオフィシャルサイトです。みなさまの誓いをぜひお寄せください。

<http://pledge.niwaka.com>



下秋泰子さん

シャンティとの出会い

シャンティとは2009年に、私たちが企業としての社会貢献活動を模索する中で出会いました。

数ある中で特にシャンティの活動が魅力的だったのは、絵本が敵しい環境に育つ子どもたちに文字を知る機会をつくり、知らない世界を伝え、夢や希望を持って明日を生きること教えること。また、地雷の看板が読めるなど文字が直接命を守ること。紛争などで分断された民族の言語を伝えることで誇りを持ち、互いの文化を尊重できるようにすること。この活動を通して広がる未来への可能性や、シャンティの現地の人々に寄り添った支援に深く感銘を受け、賛同する運びになりました。

また、ただ寄付金を贈るだけでなく、なじみのある絵本に自分たちで現地の言葉のシールを貼るといふ、参加意識が持てる手法も魅力でした。

難民キャンプの思い出

2010年8月、「絵本を届ける運動」の初回支援として、シャンティの支援先であるミャンマー（ビルマ）難民キャンプを訪問しました。山間にある難民キャンプは、竹や葉で組まれた高床式住居が密集する大きな村といった印象で、人々の暮らしは一見穏やかでした。しかし、現地の方の「ここでは子どもにも教育を受けさせられる」「命を狙わずに安心して住める」というお話に、日本では想像もできない過酷な経験があるのだと痛感させられました。

また図書館では、子どもたちに絵本の読み聞かせや「将来の夢」をテーマにしたお絵描きなどを行いました。子どもたちの夢は看護師・学校の先生・お医者さんがほとんどで、印象的だったのは「兵士」と答える男の子も多かったこと。そこに内戦の影が見えたのも、忘れられないシーンでした。

PLEDGEについて

当社のチャリティプロジェクト「PLEDGE」は、「絵本を届ける運動」を活用した、誰でも気軽に参加できる取り組みです。

「夢を誓って、絵本を贈ろう」をテーマに、チャリティ商品の購入者だけでなく、公式サイトに誰でも自由に誓いを書き込み、誓いが一定数集まると「絵本を届ける運動」を通じて絵本を寄付します。この活動は今年で11年目を迎え、近年ではシャンティの「海外絵本出版事業」にも参加しています。2020年3月までに寄付した絵本は2万403冊、現地で出版した絵本は11冊になりました。

活動に参加する 社員の感想

「絵本を届ける運動」では、絵本に翻訳シールを貼るながら懐かしくて読み込んでしまったという声や、普段目に

しない言語に興味を持ったという声もあり、異文化に触れる一端となっているようです。また「海外絵本出版事業」で出版された絵本は、想像もつかないようなストーリーや絵柄が展開されるので、毎年届くのを楽しみにしています。

これからの活動に向けて

私自身は難民キャンプを訪れたことで、日本での平和な日常や学びの場が実は貴重なことなのだ実感することができました。また、出会った人々や子どもたちの後が気になり、シャンティのサイトを楽しみに拝見しています。

この10年の間、災害や紛争、新型コロナウイルスなど多種多様な問題が生じる中で、現地の人々に寄り添い支援されているシャンティの姿に本当に頭の下がる思いです。微力ではございますが、今後とも変わらず支援を続けたいと考えております。

シャンティからのお知らせ

東日本震災から10年

～引き継がれてゆく被災地での支援活動～

巨大津波と原発事故という誰も経験したことのない未曾有の災害から今年で10年を迎えました。シャンティは震災直後から支援活動を開始し、岩手・宮城・福島に事務所を構え、復興に向けたまちづくり支援などを行ってきました。「こんな時だからこそ、今出会う本が一生の支えになる。」という地元の方からの言葉を聞き、心の支えになる本を届け、本を通じて人々が集える場を作るために「移動図書館プロジェクト」も実施しました。

2018年末にはすべての事務所を閉所し、今後は福島県南相馬市の地元NPOと協働して、東京事務所から復興事業をサポートする予定です。



人事のお知らせ

●入職 (2021年1月1日付)

山口 恵里佳 事業サポート課 海外事業担当補佐
土居 桃子 事業サポート課 海外事業担当補佐
笠松 康子 経理課 国内経理担当

●退職 (2020年12月31日付)

堤 美加 総務人事室 総務担当

2020年度の絵本が日本を旅立ちました

2020年度に集まった16,719冊の絵本がアジア各国へ向けて出発しました。2月9日にシャンティのスタッフの他、曹洞宗総合研究センターの方々にもご協力いただき、ダンボール307箱分の絵本の運び出しを行いました。コロナ禍で絵本ボランティアの受け入れや対面でのイベントが中止となるなか、オンラインを活用したワークショップなど新たなチャレンジを行い、多くの皆さまにご協力をいただき、無事に運び出しの日を迎えることができました。

2021年は14,902冊を目標に受付を行っております。今年も「絵本を届ける運動」へのご協力をお願い致します。



●異動

(2021年1月1日付)

市川 斉 ミャンマー事務所 所長→
ミャンマー事務所所長兼地球市民事業課課長

木村 沙弥香 経理及び総務人事担当→
事業サポート課 海外事業担当補佐

小長谷 陽子 海外事業アシスタント→経理課 国内経理担当補佐

岩松 智子 広報・リレーションズ課 広報アシスタント→
広報・リレーションズ課 支援者リレーションズチーム

山内 乃絵 ミャンマー国境支援事業事務所 (MBP)→
カンボジア事務所 事業調整員

(2021年2月1日付)

佐々木 ひろみ 広報・リレーションズ課 マーケティングチーム
支援者サービス担当→
広報・リレーションズ課 広報担当

シャンティ 2021年春号 (通巻309号) | 2021年4月1日発行

発行人: 若林恭英

発行所: 公益社団法人シャンティ国際ボランティア会
〒160-0015東京都新宿区大京町31 慈母会館2・3階
TEL 03-5360-1233 FAX 03-5360-1220
WEB: www.sva.or.jp E-Mail: info@sva.or.jp

編集人: 山本英里、鈴木晶子

編集・制作: 株式会社文化工房

印刷: 株式会社サンエー印刷

当会へのご寄付は、所得税、住民税、および法人税、相続税の優遇措置が受けられます。
©Shanti Volunteer Association.
「シャンティ」は、FSC®森林認証紙にノンVOCインキ(石油系溶剤0%)で印刷しています。



川畑 嘉文 (フォトジャーナリスト)

Yoshifumi KAWABATA

ニューヨークの雑誌社勤務時代に9.11を経験し、記者職を捨てて写真の道に進むことを決意。2002年、会社を退職しタリバン政権崩壊後のアフガニスタンを訪れ取材を行った。2005年フリーランスのフォトジャーナリストとなり、世界中の難民キャンプや貧困地域、自然災害の被災地で取材を行い、雑誌や新聞などに写真と原稿を寄稿している。



自動小銃の整備をする青年。

そして祖国へ

2020年2月、ミャンマー国内のカレン州のある村で一人の青年と出会いました。メラ難民キャンプに難民として暮らしていた彼は、2019年10月に国連のプログラムで家族とともに帰還すると、すぐに軍事組織KPC(カレン民族解放平和評議会)に入隊しました。村の名はメラ・トウー。ミャンマー政府軍と最後まで激戦を繰り広げながらも、カレン族が死守した村です。軍事拠点ではありませんが、村の規模は小さく主な産業はないため、職に限りがあります。事実、スパーマーケットもなく、病院すらないので。KPCに入隊すると自身の食料は提供されませんが、家族の手当では支給されないそうです。彼にとって、貧しい家計状況を軽減するために、仕方ない選択だったというわけです。



上: 塹壕の跡。山の向こうから総攻撃を受けたそう。
下: 村に落ちていた自動小銃の薬莖。

Shanti's PhotoLog

ファインダーを のぞいて

